

スクリーニング その進化と課題

疾病・障害の早期発見・早期治療を主な目的としたスクリーニングは、公衆衛生に関わる幅広い分野で活用されています。各種のがん検診やメタボリックシンドロームに着目した特定健康診査、および新生児マススクリーニングなどは、その代表と言えます。

最近では、科学技術の進歩により新しい検査法や検査機器等が次々と開発され、スクリーニングは日々進化しています。これに伴い、スクリーニング手法が適用される疾病や障害等の種類も増加しています。

しかし、進化するスクリーニングには、明るく光る部分だけでなく、影の部分も多いのが現実です。たとえば、進行が極めて遅い疾病や自然治癒も見られる疾病に対して、このような自然史を考慮せずにスクリーニングを適用すれば、過剰診断のような形で受診者に不利益をもたらします。韓国で超音波による乳がん検診(甲状腺もチェック)を推進した結果、(無治療のままでも天寿を全うする可能性の高い)甲状腺がんの患者が急増してしまったという現象は、その一例と言えます。

一方、最近のスクリーニングは、疾病の「2次予防」だけでなく、「1次予防」を目的とした方向への進化も見られます。たとえば、発病前の結核感染状態(潜在性結核感染症)の効率的なスクリーニング法として開発されたインターフェロンガンマー応答測定法(IGRA)は、結核患者の接触者の健康診断における標準的な検査となり、陽性者(未発病の感染者)に対する予防的な治療により、発病の防止が図られています。

本特集では、地域保健の現場(市町村保健センター、保健所)に身近で、かつ、最近注目されている分野のスクリーニングに焦点を当ててみました。進化する検査法や検診システムの現状と課題を学び、今後のあり方について考えていただければと存じます。

